なすしおばら げんきびと 元気人

あなたの身近な元気人を募集中

チャレンジing

>>> 栃木県高等学校野球連盟審判委員

No.30

松本 敏弘 さん

普段は黒磯消防署に救急救命士として勤務する傍ら、休みの日には多くの試合で審判を務める。試合は土・日曜に開催されることも多く、なかなか家族サービスできないのが悩みの種。

自分を信じる――
そうすれば、恐れることは何もない

ジャッジの迷いや誤審への恐れはないか？という質問に対して、「自分を信じているので、恐れなどありません」と一言。

Pick up

審判の際には、自分を信じて瞬時に判断をしなければならないが、その経験は、救命の現場でも大変役に立っていると松本さんは語っている。

高校球児が憧れる大舞台「甲子園」。かつて仲間とともに甲子園を目指した少年は、23年後、審判員としてこの地に立った。栃木県代表が優勝した第98回全国高等学校野球選手権大会。この大会に塁審として派遣された松本敏弘さんに話を伺った。

「甲子園に行けると聞いたときは、うれしくて涙を抑えることができませんでした」。松本さんは審判員として甲子園への派遣が決まったときのことをこう振り返る。夏の甲子園に栃木県から審判員が派遣されるのは、実に7年ぶり。松本さんが長年抱いていた「甲子園」という夢が叶った瞬間だった。

松本さんが野球を始めたのは小学校4年生。父親の勧めもあったが、周りの友人もみんな野球をやっていたので、自然とグローブに手を通すようになった。その後、中学、高校と野球を続け甲子園を目指したが、高校3年の夏を最後に野球から遠ざかっていた。

社会人となってからも、野球に対する思いはあり、悶々としていたところ、高校の野球部部長の勧めで審判員を体験することに。「初めて審判をしたとき、自分はこれがやりたかったと瞬間的に感じた」と話す松本さん。以来、16年間高校野球の審判員として、公式戦から練習試合まで多くの試合で真摯に経験を積んできた。

今回、憧れの甲子園、そして4万人の観客の中で塁審をした時の心境を、「試合が始まる前は場の雰囲気にのまれましたが、いざ試合が始まれば、いつもと同じように自分を信じてジャッジをすることができました」と振り返る。そして、「甲子園という夢は叶いましたが、これで終わりではありません。高校球児たちにフェアプレーの精神を教えていくことが私の使命です」と今後の意気込みを語ってくれた。

「常に謙虚たれ」自分に審判員を勧めてくれた恩師からの教えと、家族に対する感謝の気持ちを胸に、これからもグラウンドに立ち続ける。

発行・編集 那須塩原市企画部シティプロモーション課
〒325-8501 那須塩原市共墨社108-2
☎0287(62)7109 http://www.city.nasushiobara.lg.jp/